

森 仁史

某月某日、木茂先生は大きな包みを抱えて塩原（二〇〇五年に合併して那須塩原市）にご帰還とあいなった。荷物はその日本郷で入手したという大判の日本分県地図帳で、講和発効後の昭和二十八年の町村合併以前に発行され、これ以前に大規模な町村合併は明治四十年に行われていたばかりなので、明治の日本の姿を知るにはまことに好都合とのご説を承った。ページをくつていくと、木茂先生ご生誕の西和良村もちゃんと確かめることができた。木茂先生はこういう具体的な目的がなくても、何ということなしに地図を眺めるのが好きだと伺ったが、小生も同じく地図に見入ることのある人種であり、使うことも多いからその出来が気になる部類である。

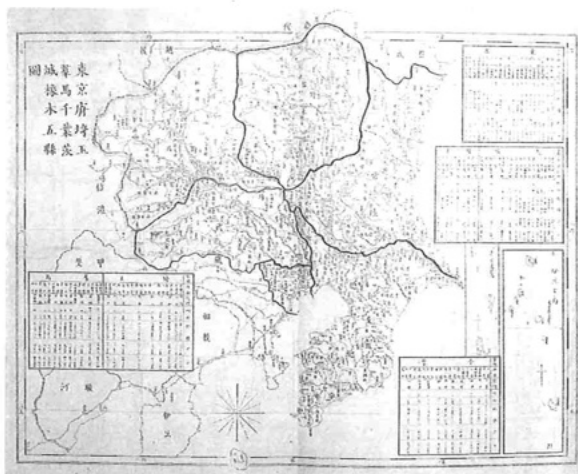
日本近代では地図という一語で map と atlas とを包含することにした。前者は三次元の地形を二次元に正確に図面化したものであり、測量と縮尺というごく数学的な手法に全面的に負っている。後者は極めて絵画的な絵図から幕末に幕府天文方によって実測図へと踏み出していたが、道中図の世界から地図帳に移ったのは明治以降になった。近代的地図においても、山地を表現するのに等高線以外に毛羽という手法や暈彫りと呼ばれる一方向からの影で山容を表現する手法など幾つもの手法があり、立場によって地図表現は異なる。さらにその再現手段としての印刷技法により、可能な水準と範囲が制約される。明治の地図のあゆみはこの二方面の技術移植、開発改良の歴史であった。

よく知られるように戦前の日本では、陸地測量部の地形図が基本的な地図として作成され流布していた。しかし、同部の創設は明治二十一年であり、維新以来地図製作の手法と形式が初めから一定していたわけではない。

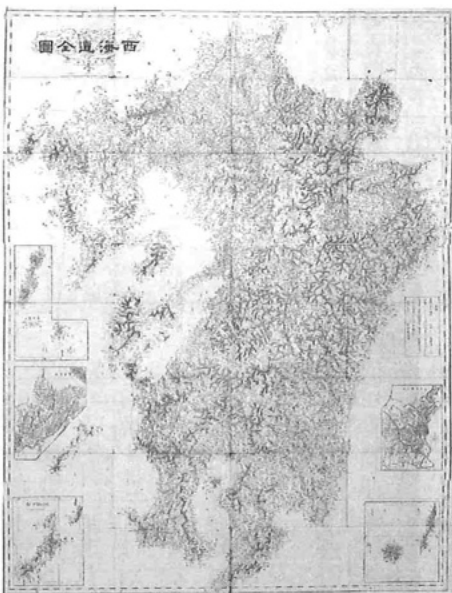
つまり、地図では西欧の理念と手法とによって近代化を進めようとしてから、二十年の試行の時期があつて、美術では東京美術学校が創設されたのがこの翌年であつたことを思い起こせば理解しやすいであろう。

『測量・地図百年史』（建設省国土地理院、昭和四十五年）によれば、地図製作の歩みは始めから軍事目的だけだったわけではなく、明治四年に工部省は測量司を設け測量司長マックウェインら英国人を雇い入れた。七年に工部省から内務省地理寮に組織変更されて後、明治十年には「地籍図」（縮尺六百分の一）を完成させた。これは今日も土地所有の確認のために時として利用されている地図であり、地方自治体が所有するものなかでは、恐らくもつとも頻繁に利用される公文書ではないだろうか。十年に地理局と改称され、イギリス式三角測量に着手し、十一年には「実測東京図」を完成させた。十三年には伊能図を基本として、従来の諸図を参考に百六十分の一「日本全国輿地図」を作成し、次いで英国式暈彫り法によって「大日本全図」などを作成した。この中心になつていたのが荒井郁之助であった。荒井は天保六年生まれの幕臣であり、海軍伝習所でオランダ人から航海測量術を学び、軍艦頭、歩兵頭並を歴任していた。戊辰戦争時には陸軍総裁に一度は説得されて品川に戻ったが、榎本らとともに函館に渡り、五稜郭で捕虜となり三年間下獄し、明治五年から開拓使に出仕し、十年に地理局測量課長となつた。時に四十三歳であつた。明治六年ウィーン万博のために渡欧した岩橋教章はこの部下になる。岩橋も同じく幕臣であり、文久二年に伊勢志摩尾張で測量の経験があつたが、やはり五稜郭に渡っている。中森同人のご教示によれば、内務省地理局は岩橋教章の文会舎で「測地図譜」（二千五百分の一）や「測地絵図」（二万五千分の一）を制作させ、明治十四年には前年の地理局の結城正明の鐫刻による「日本府県地図」をもとに「大日本府県分轄図」（図一）という日本初の官製地図帳も作成されたということだ。

一方、同じく明治四年兵部省参謀局に間諜隊が設けられ、「平時においては地理の偵察・調査と地図の編纂作成」を任務とした。彼らは明治十年



1 「大日本府県分轄図」 (明治14年)



2 「西海道全図」 (明治10年)



3 「輯成二十万分一地図」東京 (明治21年)

西南の役に際しては「西海道全図」(図2)を編集、転写石版によって軍用地図を提供した。明治十一年十二月参謀本部が設置され、同測量課長小菅智淵工兵少佐は「全国測量一般の意見」を具申した。「測量ハ兵家ノ要務ニシテ強國ノ基礎ナリ。…国郡図及び地理図：ハ軍旅ノ脈絡戰略ノ智腦ナリ」と説き、十年計画で日本全国の五十分の一図を測量・作成しようという計画であったが、山県有朋参謀本部長は趣旨には賛成したが、一千万円という予算額に躊躇したので、小菅は簡略化した方法によって二百万の一図で全国をカバーする案を作成し、見積り金額は二十万円に縮小され、これが実施された。いわゆる「迅速測図」である。小菅も幕臣であり、昌平齋から軍艦操練所、開成所で学んだ。やはり榎本に倣い、五稜郭で捕虜となったが、兵部省に出仕し、初代陸地測量部長に就任した。

明治四年プロシヤに渡った田坂虎之助工兵大尉(旧広島藩士)が十五年に帰国し測量課長となり、三角測量がドイツ式に改められ、翌年図式もドイツ式一色線号式に改められ、これが現在に継承されている。それ以前のフラン

ス式一色線号式に改められ、これが現在に継承されている。それ以前のフラン

ス演彩図式は地図の彩色と視図と呼ばれる景観や建物を添える方式で、このために多くの画工が雇われていた。十四年、木村信卿大佐が清国への地図流失の嫌疑で逮捕され、製図御用掛大島宗美、八等出仕川上冬崖と十一等出仕渋谷信夫らが自殺をとげた。木村は前記「日本全国輿地図」の製作者の一人だったが、メルメ・デ・カシオンからフランス語を学んでいた。問題の地図はすでに公開されていたもので、山県らによるフランス派の排除のフレームアップと考えられている。十七年には伊能図を基本とした「輯成二十万分一地図」作成に着手し、これが明治期の日本を代表する地図となった(図3)。これらの成果は二十年四月から一般にも販売され始め、大正十四年によくやく国内の五十分の一図が完成した。しかし、日清・日露戦争、第一次世界大戦と戦争と領土拡大のたびに測量部員は次々と測量に追われ、ひたすら実測作業を続けねばならなかった。

総体としてみると、陸軍、工部省の地図作成はともに幕府開明派の遺産に基づいていた。日本が近代化を推し進めるときにそれぞれの分野

で何に根拠を置くのかを考えれば、これはきわめて明快な結論であった。分野によって近代化に違いがあるとしたら、それは維新までに蓄積された遺産の量と質に依るのに違いなく、測量、地図製作においては幕府の軍事教練と数学が基礎となった。両者とも自然科学のなかでは近世の遺産が高い水準に到達していた分野であり、それに依拠して進むことが可能な領域であった。

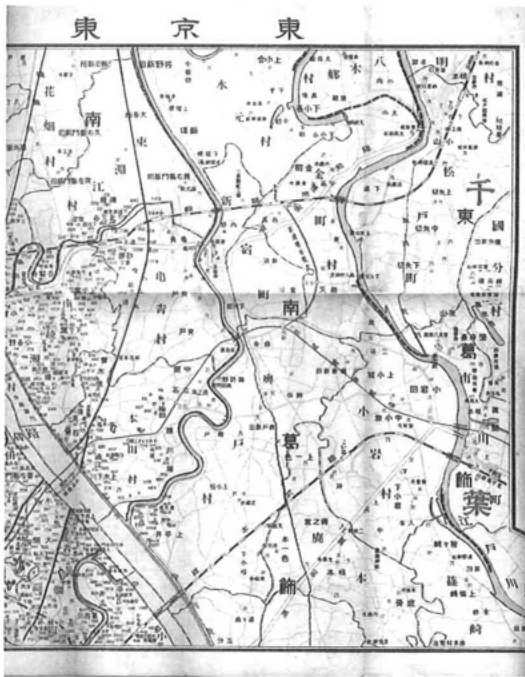
他方、海図については明治三年四月「海軍創立二関スル柳惣五郎楡悦ノ建議」が兵部卿に提出され、それは「海軍ノ創立ハ必ス航海測量ヲ基トス」と説き起こした。柳楡悦は天保三年生まれの津藩士で和算家として著書もあった。伊勢湾測量の経験もあり、選ばれて安政二年から第一期生として海軍伝習所で二年間学び、荒井とはすれ違いが同世代であった。旧藩のスキヤンダルに巻き込まれ維新後すぐには上京できず、明治三年に兵部省出仕が命ぜられ、四年七月海軍部水路局創設とともに四十八歳にして部長となった。柳は明治十一年初めて英仏に渡ったときには、和算書を土産にするほど日本の数学の水準に自信をもっていた。十年に洋算和算の別を超えて日本で最初の学会組織、東京数学会社が創設されるのに参画し、二十年には大日本水産学会幹事長にもなった。その楡悦も数学会で明治二十三年には「馥郁タル古梅」と評され、留学帰りの菊池大麓ら先端をいくものとはやや別格とみなされるようになった。この分野でもこの時期分水嶺を過ぎるのが映しだされているように思える。柳は明治十三年海軍少将となったが、二十一年退役し、その功績によって元老院議員となり、二十三年には貴族院勅選議員となった。

楡悦五十七歳の子が宗悦であるが、彼が二歳のときに父はインフルエンザから肺炎をおこし死亡した。宗悦が成人して学習院高等科在学中に『白樺』の創刊に加わった頃、興味をもち熱中したのがメーチニコフであり、心霊現象であった。彼は新進の宗教学者として世に出たのである。そこに新旧の交代と変わりゆく時代相の生命への関心のかまきりを見たい気がする。つまり、旧世代が確実に自己の資産としていたものを近代につなぐと

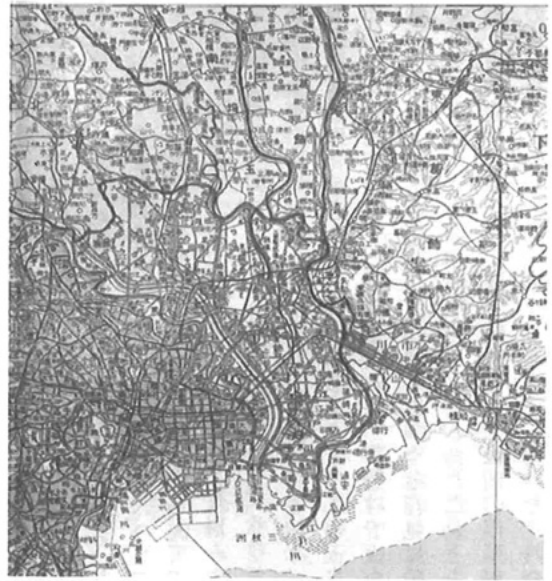
きには、自分の側で調整をする能力も自信もあったが、新世代は総て新たに学んだ体系しか拠り所がないわけで、移植した知識と構想に全く身を委ねて新体制に埋没するか、それを疑うとすればただ新時代への自身の意欲と熱情を信じるほかにないことになった。柳は「来世の存在に向かつて真に肯定的の答へ」すなわち「新しき科学」を激しく求めた。それがいわゆる生命主義の燃えいずる根源なのであろう。

一般の人々に近代測量の成果をもとに自然、人工環境を分かりやすく伝える本格的な地図帳の登場は大正になった。そうした初期の試みとして小川啄治『日本地図帖』（大正十三年）、藤田元春『新日本図帖』（昭和九年、刀江書院）が挙げられる。小川は田辺藩儒家の生まれで、貝塚茂樹、湯川秀樹の父である。明治二十九年東京帝国大学理科大学を卒業し、ドイツ留学帰りの原田直吉と論争するほどの学識を蓄えていた。四十一年京都大学文学部地理学講座開設と同時に教授として赴任した。秀樹が生まれた頃、小川は柳の麻布市兵衛町の五千五百坪の邸宅の一角にあった借家に住んでいた。藤田は小川の京都大学での教え子で、第三高等学校教授であった。前者は高価で手が出ないが、たまたま入手できた後者をほぼ同時期のポケット地図と較べると（図4、5）、後者がただ道路と鉄道だけを正確に再現するのに対して、わが松戸近くでは江戸川河岸段丘が連綿する姿が描き出されており、藤田の努力が地形の表現ではより優れているように思える。また、巻末には二百ページに及ぶ五十音順地名索引と難読地名一覧が付され、地図利用の便を飛躍的に高めている。布クロスの背に紺色で上部に富士山、下部に波を型押しした洒脱な装幀（図6）は残念ながら作者は表記されていない。なにより見開きの地図をのどまで無理なく開くため丁寧に一枚づつ地図を背に布で糊付けするという入念な製本には藤田の地図作りへの熱意を感じることができよう。

いったいに日本人は他から新しい体系を受け入れて、それに改良を加えて新境地を開くことを得意とする。地図はただ地形を忠実に描くだけでなく、一つの意図の元に概念を視覚的に理解させることに用いると、地図の



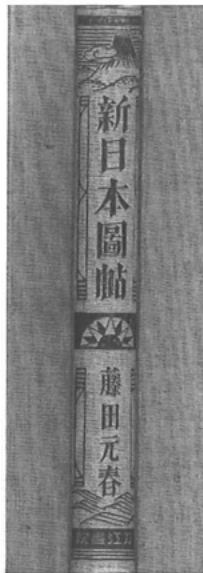
5 同 (『大東京市郊外地図』 雄文館、大正 14 年)



4 千葉県西北部 (『新日本図帖』)



7 大東亞共栄圏展より (1940 年)



6 『新日本図帖』

客観性をテーマの説得力に利用することができる。理解しやすい地図帳の編纂だけでなく、とくに政治宣伝において様々な事象を視覚化アイコン化し、言語によらず図示するピクトグラムは国内外で便利で効果的な手法として、国策を伝える展覧会や印刷物に重宝に多用された(図7)。日本のデザイナーはこの時期の実験のなかで、飛躍的にその能力を向上させた。この実践を担った人々は東京オリンピックの案内表示にその成果を遺憾なく発揮し、その後世界にこの手法が普及するのに見事な先例を示すことができた。この手法は明治初期のフランス式地図の系譜に連なるように思われ、めぐりめぐって地図表記の選択が日本人の資質に適ったものだったかどうか考えてみたい気がする。

一寸

第三十号 二〇〇七年四月

新・旧刊案内 30

書痴、戦時下の発禁本を読む そのII

青木 茂

第三十号目次

新・旧刊案内 30

書痴、戦時下の発禁本を読む そのII

デザイナーとしての梶田半古

白描絵巻と『新版画』所収作

―藤牧版画の後摺りについて 16

小山正太郎研究拾遺(一〇)

「春日山」四十二年十一月九日

失われんとする一文学部建築のために

幼年技生大山助市の石版画

銅・石版画遺聞 26

近代への渡河―地図の場合

■書書遊遊

昭和の円本をのぞいていたら水島爾保布が出てきた

青木 茂 1

岩切信一郎 7

大谷 芳久 15

金子 一夫 22

丹尾 安典 26

森 登 32

森 仁史 36

山田 俊幸 40

■好評に依って、「発禁本を読む」の第二弾を贈る。とはいえ別に好評ではなかったのが実情である、これは景気づけみたようなものである。ただし戦時下の日本の出版文化がどのような状況であったかを調べようとしていると、架蔵本のなかから「筆禍」という古い言葉に相当しそうなものにあつたいとしい、図書をも一度とり出してみようという気持になっただけである。

■それを順不同で書く
・田村栄太郎「川路聖謨」昭和十七年十月二十日(三千部)、日本電報通信社出版部、B6判、三六一ページ、図版、装幀山口蓬春、郷土偉人伝選書第二卷

は、十一月十一日付で「序二頁徳川時代の帝室の立場を述べ之を賞揚せる記述なるも瘦我慢の表現は尊厳を害う虞あり、次版改訂」と命令される。そこで二ページを開くと、田村は福沢諭吉の勝海舟批判「瘦我慢の説」を引用しただけなのが判る。海舟が瘦我慢をせず徳川に臣節をつくさず薩長に妥協したのを批判したのは諭吉で、「瘦我慢こそ、帝室の重きを成したる由緒なれ」と書いたのは諭吉で、田村ではない。「次版改訂」は冥界の諭吉でなければできない相談である。田村は序文でも海舟ではなく、臣節を全うして江戸開城の日に自殺した川路聖謨こそ実践躬行の人だとしている。川路聖謨の生涯を正確に熟をもって述べている。僕は先年、観光気分で佐渡銀山を見たのちにこの書の「佐渡奉行・普請奉行時代」の章を読んで冷水をかけられたような思いをしたことであつた。また工部美術学校生徒の川路花子と川路新吉郎の関係が知りたくてこの書に依つたこともあ